

小学校教員の養成段階における保健授業の指導力向上に 向けた教育実践

—学生および現職教員の意識やニーズを踏まえた取り組み—

久保 元芳・荒木 絵理

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第5号 別刷

2018年8月3日

小学校教員の養成段階における保健授業の指導力向上に向けた教育実践[†]

—学生および現職教員の意識やニーズを踏まえた取り組み—

久保 元芳*・荒木 絵理**

宇都宮大学教育学部*

元宇都宮大学教育学部学生**

小学校の保健授業は、子ども達が生涯に渡って健康で安全な生活を送るための基盤的能力を身につける上での貴重な機会である。本報では、小学校の教員免許状の取得を希望する学生および保健授業に熱心に取り組んでいる現職の小学校教員を対象とした調査を実施し、その結果を踏まえて小学校の保健授業の指導力向上のための大学での教育実践をデザインした。保健授業の小学校学習指導要領上での位置づけの理解や、保健授業における教材および指導方法の工夫等について組み込んだ実践の結果、「学習指導要領に示された保健の位置づけに関する知識」「保健授業で各種指導方法を活用する自信」等の評価指標において、実践の前後でその数値が有意に上昇するなどの効果が認められた。

キーワード：保健授業、指導力、小学校、教員養成、学習指導要領

1. はじめに

教員の指導力の向上を図る上で、大学での教職課程が重要な役割を担っていることは言うまでもない。しかしながら、現状としては教職課程が専門職業人たる教員を養成することを目的とするものであるという認識が、必ずしも大学の教員の間に共有されていないため、教育職員免許法に定める「教科に関する科目」や「教職に関する科目」が、教職課程としてふさわしい教育内容となっていないという課題も指摘されている¹⁾。教員養成を担う大学教員は、教職志向の学生の指導力を育成するために、担当科目の位置付けや趣旨を勘案した上での不断の授業改

善に取り組むことが求められる。

そうした視点を踏まえた上で、教員養成段階における小学校の体育科保健領域に関わる教職課程の現状を見ると、不十分な状況がうかがわれる。具体的には、小学校の体育科は「運動領域」と「保健領域」の2領域が位置づいており、養成段階では各領域の学習内容に関する知識や指導法等を身につける必要がある。しかし、小学校教員の養成段階における体育科の指導法の科目においては、「保健領域」を扱う授業時間が「運動領域」に比して極端に少なく、保健を専門としない体育科教育担当者が1回(コマ)程度担当したり、保健領域をまったく扱わない場合もあったりすることなどが報告されている²⁾。

学習指導要領の規定上、「保健領域」の配当授業時数が「運動領域」に比して少ないという背景はあるものの、生活習慣の乱れ、心の健康問題、薬物乱用、性感染症などの子ども達を取り巻く様々な健康問題が顕在化している現在、小学校の保健授業は子ども達が生涯に渡って健康で安全な生活を送るための基盤的能力を身につける貴重な機会である。こうした点などから、小学校教員の養成段階における保健授業の担当能力の育成は、重要な課題と言える。

本報では、小学校の教員免許状の取得を希望する

[†] Motoyoshi KUBO* and Eri ARAKI**: An educational practice for improving teaching abilities of health education class in elementary school teacher training course: Based on consciousness and needs of university students and incumbent teachers
Keywords : health education class, teaching abilities, elementary school, teacher training course, courses of study

* School of Education, Utsunomiya University

** School of Education, Utsunomiya University, Former student

(連絡先: kubo@cc.utsunomiya-u.ac.jp 著者1)

学生を対象とした質問紙調査、保健授業に熱心に取り組んでいる現職の小学校教員を対象としたインタビュー調査をそれぞれ実施することを通して、小学校教員の養成段階にある学生に求められる保健授業の指導に関する資質や能力を検討すること、また、そこで検討された事項を踏まえた小学校の保健授業の指導力向上のための大学での教育実践の効果を検証することを目的とした。

2. 教員養成課程の大学生および現職教員を対象とした調査

(1) 大学生を対象とした質問紙調査

①方法

国立大学法人U大学教育学部の教員養成課程の学生で、小学校教科科目「体育A」の講義を受講した186人を対象に、無記名自記式の質問紙調査を実施した。その際、プライバシーの保護やデータの取扱い等について説明し、合意を得た上で実施した。半数以上の項目を無回答の者など3名を除いた183人（男80人、女103人；2年生131人、3年生42人、4年生10人）を解析対象とした（有効回答率98.4%）。本対象学生は、小学校の保健授業の内容や指導法を扱う科目を未受講の者である。調査時期は2012年7月下旬であった。

調査項目は、小学校で受けた保健授業のイメージ、小学校の保健授業の指導に関する基礎的経験、小学校の保健授業で扱う内容を指導する自信、小学校の保健授業において各種指導方法を活用する自信などであった。

②結果および考察

小学校で受けた保健授業が「好きだった」または「どちらかといえば好きだった」者は25.1%、「嫌いだった」または「どちらかといえば嫌いだった」者が26.8%、「覚えていない」者が48.1%であった。

小学校学習指導要領に示された保健の目標や内容を閲覧したことがある者は14.8%、小学校の保健授業の実施学年を理解している者は0.6%、大学入学後に小学校の保健授業を見学した経験のある者は27%と、いずれも低かった。一方で、大学で小学校の保健授業の内容や指導法を扱う授業を受講したいと回答した者は80.3%と高く、小学校の保健授業の指導力向上に対しては前向きである者が多かった。

小学校の保健授業で扱われる内容を指導する自信がある者の割合をみると、「健康の大切さや健康に良い生活」60.6%、「体の発育・発達」38.8%、「心

の発達及び不安、悩みへの対処」39.4%、「けがの防止や、けがなどについての簡単な手当て」48.1%、「病気の予防」42.6%、「地域の様々な保健活動」29.0%と、ほとんどの項目で5割を下回っていた。

各種指導方法を活用して保健授業を指導する自信がある者は、教科書の活用（57.4%）が最も高く、ワークシート（42.1%）、ケーススタディ（41.0%）、ブレインストーミング（34.4%）、発問（29.0%）、ロールプレイング（27.9%）、実験・実習や実地調査（19.7%）と続いた。教科書の活用以外はいずれも5割を下回っており、特に児童の主體的な参加を促す指導方法を用いる自信が十分でない状況がうかがえた。

小学校で受けた保健授業に対して否定的イメージを持っている（「嫌いだった」または「どちらかといえば嫌いだった」）学生は、肯定的イメージを持っている（「好きだった」または「どちらかといえば好きだった」）学生に比して、保健授業の指導に対する自信が有意に低率を示した。小学校で受けた保健授業に対して否定的なイメージを持つ学生が少なからず見られる中で、そうした学生に対して、保健授業のイメージを改善し、指導内容への興味・関心や多様な指導方法を用いることの自信を高めるような大学での教育の必要性が示唆された。

(2) 現職教員を対象としたインタビュー調査

①方法

T県内の保健授業に関する民間の研究会に所属し、保健の授業づくりに熱心に取り組んでいる30～40歳代の現職の小学校教員3名（A教員、B教員、C教員とする、教職歴14～24年）を対象に、半構造化インタビュー調査を個別に実施した。調査にあたっては、回答内容を録音すること、プライバシーの保護に留意すること等を説明し、同意を得た上で実施した。質問内容は、保健授業で取り入れている教材や指導方法とその留意点、保健授業の指導を通して感じる成果と困難な点、教員養成段階において身につけておくべき保健授業の指導に関する資質や能力などであった。調査時期は2012年12月中であった。

②結果および考察

保健授業で取り入れている教材や指導方法として、3名ともに自作のワークシートを用い、子どもの意見を引き出したり理解を促したりするという方法を基本として進めていた。また、例えば、ケーススタディは3・4年生で多く取り入れる（B、C教員）など、児童の発達段階を考慮した教材や指導方法を

選択していることも確認された。こうした点から養成段階では単に指導方法を学生に紹介するのに留まらず、その指導法が子どもの発達段階に照らして、どのように活用すると有効かについて考えさせる工夫も重要であることが示唆された。

保健授業の成果を感じる点としては、学習したことに基づいて児童の生活の改善がみられた時（A、B教員）、教材を工夫することで、児童が健康について常識と思っていた思考を「揺さぶる」ことができた時（C教員）などであった。困難に感じる点としては、学習指導要領で示された大綱的な内容を児童の生活に結びつけた形で具体的に教材化すること（A教員）、児童の「気づき」を促したいが、その気づかせ方について難しいと感じる場面があること（B教員）、健康に関する各種の原理・原則について教える際に、児童が納得できるような展開をもつ授業を構成すること（C教員）などが挙げられた。これらのことから、児童の行動変容や学習内容についての深い理解を促すために日々試行錯誤している状況がうかがわれた。養成段階においては、教育内容と教材との関係性についての理解を深めるのと同時に、そうした点が具現化された優れた授業実践に触れることも重要であることが示唆された。

養成段階において身につけておくべき保健授業の指導に関する資質や能力については、何のために保健授業を行うのか、学習指導要領に基づいて保健授業では何を教えるのかを理解しておくこと（A、B教員）など、保健授業を行う意義やその学習内容についての理解を深めることが挙げられた。また、学習指導要領で示された内容について関連するネタ（教材）を探して指導できるようにしておくこと（A教員）、子どもの立場に立って、子どもがどう考えるか、どう行動に結びつけられるかを考えておくべき（B教員）、教師になったらこうやって教えたいというイメージを作っておくことが必要（C教員）など、保健授業に関わる実践的な指導力の基盤となる意識や能力が挙げられた。

(3) 調査から得られた示唆

両調査の結果から、小学校教員の養成段階において、主に以下の3点を重視した取り組みを推進することを通じて、学生の保健授業の指導に関わる資質能力を向上させていく必要性が示唆された。

i. 小学校学習指導要領に示された、保健領域の位置づけや目標、学習内容について理解させるこ

とを通じて、その意義を実感させる。

- ii. 発達段階や学習内容に応じた適切な教材や指導法について実践的に学ばせることを通じて、保健授業の指導に対する自信を向上させる。
- iii. 優れた保健授業の実践例の紹介、学生による保健授業の構想や模擬実践を取り入れることを通じて小学校の保健授業の実践的な指導力の向上を図る。

3. 小学校保健授業の指導力向上のための教育実践

(1) 実践と評価のデザイン

調査結果から得られた3つの示唆を勘案した上で、小学校教員の養成段階における保健授業の指導力向上に向けた授業をデザインした（表1）。対象とした国立大学法人U大学のカリキュラムの関係上、小学校の保健授業の内容への配当時間は小学校教科科目「体育B」での3回（コマ）分であったため、授業の枠組みを「小学校学習指導要領上の保健領域の位置づけの理解」「保健授業における教材の考え方」「保健授業における多様な指導方法の工夫」の3テーマで構成し、それぞれの時間に位置づけた。

表1 授業の流れ

	授業の内容
第1回 (90分)	テーマ「小学校学習指導要領上の保健領域の位置づけの理解」 1. 小学校時に受けた保健授業のふり返り 2. 小学校の保健授業についてのQ&A ・学習指導要領上の位置付け（領域、目標、内容構成、実施学年、配当時間等） ・指導上の留意点（体の発育に関わる内容、こころの健康に関わる内容等） 3. 保健授業の価値と独自性
第2回 (90分)	テーマ「保健授業における教材の考え方」 1. 保健の教育内容と教材との関係 2. 保健授業での教材の多様性と教材研究 3. 魅力的な教材を用いた保健授業実践例のVTR視聴 4. 教材としての保健教科書を考える
第3回 (90分)	テーマ「保健授業における多様な指導方法の工夫」 1. 多様な指導方法の紹介と実践的理解 ・発問の工夫 ・ブレインストーミング ・ケーススタディ ・ロールプレイング ・実験や実地調査 ・課題解決的な学習 2. 多様な指導方法を用いた保健授業の紹介 3. 保健授業における連携とは？

授業の展開にあたっては、授業の内容に関する講

義に加え、クイズ、ブレインストーミング、グループでの話し合い、VTR視聴などの活動を適宜取り入れた。なお、第3回目の授業における「多様な指導方法の紹介と実践的理解」においては、各指導方法を児童役として体験させることに加え、教師としてどのような内容の指導場面で活用できそうかを考えさせる活動も取り入れた。

受講者は小学校の教員免許の取得を希望する学生45名であり、授業者は、保健科教育を専門とする大学教員が担当した。

授業の評価指標としては、「学習指導要領に示された保健の位置づけに関する知識」(5項目)、「小学校保健授業で扱われる内容の理解度」(6項目)、「小学校保健授業で各種指導方法を活用する自信」(8項目)、「学校内外の専門家や保護者との連携による小学校保健授業の実施の意思」(3項目)を設定した。1回目の授業前と3回目の授業後でそれぞれ質問紙で調査し、両調査に回答した学生43人を解析対象として、授業前後での正答率や回答割合の比較をMcNemar検定を用いて実施した。

(2) 実践の効果

学習指導要領に示された保健の位置づけに関する知識の正答率は、「体育科の構成」(81.4%→93.0%)、「実施学年」(30.2%→86.0%)、「学習内容」(58.1%→76.7%)、「指導方法の工夫」(65.1%→100%)、「担当者」(74.4%→97.7%)の5項目のいずれも授業後に向上が見られ、「実施学年」「指導方法の工夫」「担当者」では有意差が示された。

小学校保健授業で扱われる内容の理解度について「理解できている」または「やや理解できている」と回答した者は、「健康の大切さや、健康に良い生活のあり方」(79.1%→90.7%)、「体の発育・発達について」(55.8%→69.8%)、「心の発達及び不安、悩みへの対処」(27.9%→60.5%)、「けがの防止や、けがなどの簡単な手当」(39.5%→51.2%)、「感染症や生活行動がかかわる病気の予防」(51.2%→62.8%)、「地域の様々な保健活動」(11.6%→27.9%)の6項目のいずれも授業後に向上が見られ、「心の発達及び不安、悩みへの対処」では有意差が示された。ただし、「健康の大切さや、健康に良い生活のあり方」以外の5項目は授業後でも7割に満たず、総じて十分な理解状況にまでは達していなかった。

小学校保健授業で各種指導方法を活用する自信について「自信がある」または「やや自信がある」と

回答した者の割合を表2に示す。8項目のいずれも授業後に有意に向上した。

表2 各種指導方法を活用する自信

項目	肯定的回答の割合		有意差
	授業前	授業後	
①教科書の活用	58.1%	81.4%	p<.05
②ワークシート等の活用	46.5%	76.7%	p<.05
③発問の工夫	18.6%	39.5%	p<.05
④ブレインストーミング	9.3%	53.5%	p<.05
⑤ケーススタディ	27.9%	69.8%	p<.05
⑥ロールプレイング	14.0%	48.8%	p<.05
⑦ディスカッション・ディベート	23.3%	51.2%	p<.05
⑧実験・実習や実地調査	14.0%	44.2%	p<.05

学校内外の専門家や保護者との連携による小学校保健授業の実施の意思について「実践してみたい」と回答した者は、「学校内の養護教諭や栄養教諭等」(58.1%→79.1%)、「学校外の専門家(医師、歯科医、薬剤師等)」(51.2%→62.8%)、「保護者」(30.2%→46.5%)の3項目のいずれも授業後に向上が見られ、「学校内の養護教諭や栄養教諭等」では有意差が示された。

4. まとめと今後の課題

本実践により、小学校教員の養成段階の学生における保健授業担当に関する資質や能力の向上に一定の効果が示された。ただし、3回(コマ)での実施であったことなどから、保健授業で扱われる内容の理解度等においては、十分な効果は示されなかった。小学校の保健授業で扱われる内容の理解を促しながら、保健授業の実践的な指導力を身につけるための取組の開発については今後の課題である。

付記

本実践は、平成24年度宇都宮大学教育学部個性化プロジェクトの助成を受けて実施されたものである。

文献

- 1) 中央教育審議会、今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)、p8(2006)
- 2) 物部博文、杉崎弘周、植田誠治、小学校教員養成段階における体育科指導法の内容分析、日本体育学会大会予稿集、Vol.66、p342(2015)

平成30年3月30日 受理

**An educational practice for improving teaching abilities of
health education class in elementary school teacher
training course: Based on consciousness and needs of
university students and incumbent teachers**

Motoyoshi KUBO and Eri ARAKI